
とある科学の万屋蛇姫～アスクレピオス～

ゆーたん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある科学の万屋蛇姫〜アスクレピオス〜

【Nコード】

N1811P

【作者名】

ゆーたん

【あらすじ】

総人口二百三十万人を誇り、最新鋭の科学が集められた学園都市で起きる不可解な事件。魔女の血を引く一人の少女、美堂エリス―
―祖父から受けついだ毒蛇の牙を右手に宿し、学園都市を飲み込む闇を咬み砕く。

辻斬り事件（前書き）

とあるシリーズ久々の新作（笑）

辻斬り事件

「はあはあ」

一心不乱にスーツ姿の女性が、街灯の疎らな夜の街を駆け抜ける。すでに繁華街から遠く人通りは皆無に等しい。走るのに適さないヒールは等に脱ぎ捨て、足の裏には小さな砂が張り付いていた。

時々背後を気にしながら、若干引きつったその表情は恐怖という二文字を内外に知らしめる。

「きゃ」

不意の拍子にもつれた足が、自身を地面へと抱き寄せられた。運悪く膝を打ち付けた女性は、力の入らないその右足を懸命に鼓舞しよろよろと立ち上がりながら前に前にと体を進める。そんな女性の耳にとある音が風に乗って届けられた。

「ひっ」

その音はアスファルトの路面の上を何かを擦らせながら、女性の方へとやってくる。カラカラと音をさせ男とも女ともわからない、下卑た笑い声を囁きながら。

「いや……」

必死に逃げてきた女性であつたが、自分の後ろから来ていると思われていたその音。それが自分の前から来ている事に気づき恐怖でその場に崩れ落ちた。暗い夜道を仄かに照らす街灯。その音の正体がやがて街灯の下に晒されると、女性は後ろへと後ずさった。

不潔感を漂わせたボサボサの長い髪。左手に携えているそれが地面に擦れて、カラカラと音を鳴らしている。それが何か認識するまでさほど時間は掛からなかった。獲物を捉えた存在は、右手で何かを引き抜くと、街灯に輝かされた白銀の刃が姿を現す。左手に持っていたそれは鞘、それをゆっくりと路面に落とすと、俯いていた顔を女性に向けた。やせこけた頬に今にも飛び出しそうにむき出された眼、にやりと笑ったその口からは涎が滴る。

「きゃああああ」

一太刀で絶命させられたその遺体の傷口から、凶器は並々ならぬ切れ味の刃物——刃の長さからいつて日本刀と断定された。

これが、学園都市に起きた辻斬り事件最初の夜であった。

総人口230万人の8割が学生の学園都市。そこでは学生全員を対象にした超能力開発実験が行われており、全ての学生はレベル0（無能力者）からレベル5（超能力者）の6段階に分けられ、様々な能力を開花させている。超能力が科学的に証明された世界。科学力が外界の十数年以上も先に進んでおり、強固な外壁と防備力によって外界から隔離されている。学園都市への入出管理も厳重で、許可が無い者の中には入ることすら適わない。

学園都市は二十三に分けられた学区で構成されており、それぞれの学区後とに役割など様々である。

そんな最新鋭の科学技術が集まったこの学園都市で、一つの大きな事件が起きている……。

『辻斬り事件』

ハイテクな学園都市では想像も出来ないほどアナログな事件。しかし事は思いのほか大きく、すでに三十名近くが被害にあっており、傷の程度は重軽傷から死亡まで多岐にわたる。被害の状況から得た特徴は、犯行は夜で老若男女問わない無差別な犯行。

これに対し学園都市の警察である、超能力開発対象外の大人で構成された警備員^{アンチスキル}は、夜間の見回りを強化し夜の外出を控えるように案内している。警備員は学生と違い、能力が使えない分を補うため、外界の数十年以上も発達した最新鋭の兵装で殲滅に当たる。普段は別の仕事をしている大人達が、ボランティアでやっている組織である。

これとは逆に学生達で構成された組織の風紀委員^{ジャッジメント}が存在する。能力者、無能力者を問わず有志で集まった学生達の組織で、能力者の犯罪等にも度々出動したりしているが、警備員^{アンチスキル}より権限は少なく危険度が高い場合は大抵、避難活動要員としている。

これら二つの組織が協力し昼夜の見回りを続けているも、犯人はいまだに捕まらない。それどころか姿を見ることさえ適わないまま、新たな被害者を出してしまう事になった。

民衆の不安を煽るような見出しがデカデカと一面を飾っている新聞を見ながら、黒髪の少女はスティックキャンディーを口の中に放り込む。口を動かすと同時に口から出た白い棒が上下左右に連動して動く。少女のいる場所は見晴らしのいいビルの屋上で、周りには状態の良いビルと悪いビルがそれぞれ見渡せる。

ここは学園都市のスキルアウトと呼ばれる不良たちが溜り場になっている第十学区という場所であり、廃ビル等が彼らの格好の溜り場となっている。元々不良ではなく、能力開発に挫折したもの達もここに住み着くようになり、たびたび警備員^{アンチスキル}が検挙に訪れたりしている。

その中でも比較的綺麗なビルの屋上に心地よい強さの風がさやく中で、少女はリクライニング機能付きの折りたたみ式ビーチチェアの上に身を預け、日差しを避けるためパラソルをその隣に展開していた。右手はチェアの肘掛から外側にはずしだりと下へたらしめている。小さな丸型レンズのサングラスから覗く、紫電の瞳が新聞の文字を追いかける。

わりと大きく感じるカラーブラックのロングジップパーカーの中にはオフホワイトのバルーンチュニックが顔をだし、パーカーの裾からはほんのりカラーブラックのショートパンツが姿をちょこんと覗かせていた。

椅子の足元の方にはビーチサンダルが置かれており、まだまだ陽気が暖かい事を認識させる。

「辻斬り……」

まだ幼さの残る少女の声が頻発している事件の名称を口にした。
読み終えた新聞を折りたたみ、椅子の下へ落とすと両手を頭の下に敷きパラソルの裏側を眺める。頭に思い描かれたのは良く知る人物。黒髪のツンツン頭に自分と同じ丸型レンズのサングラス、不適な笑みと勝気な口調。自分に仕事を持ってきた自分の祖父くそじいの顔。

「おーいエリス。これ解決しておいてくれ」
「はあ？何であたしが」

いつものように自己中で勝手な祖父である男性は、加えタバコをしながら悪びれも無く笑顔で話します。

「そもそもお祖父ちゃんが取ってきた仕事でしょ？そんなんじゃ、奪還屋として名を馳せた美堂蛮の名折れよ」

祖父に負けず劣らずな生意気な口調の少女は、嫌よといわんばかりに顔を背けるも「よろしくな」という強引な一言と新聞をエリスに手渡した。

「最近起きてる辻斬りな……、あれは恐らくこちら側のモノだ。俺ばあさんも祖母マリアや、育ての親から少しだけ聞いたただだが、まさかここでこんな代物に出会うとはな」

勝気な祖父にここまで言わせるその代物に、エリスは無意識ながら少しだけ興味が沸いた。

『ま、俺は他にやることあるからよ。この件はお前に任せるぜ』

「ちえっ」

すでにここから立ち去った祖父の背中を思い出し、誰にといいわけでもなく少しだけ拗ねた少女は、立ち上がってサンダルを履き、このビルの自室へと向かった。

辻斬り事件（後書き）

なるべく更新できるように頑張ります。

痕跡（前書き）

もっと見やすく面白くするため、書き方やコツを研究しようと思います。

やっぱり力不足は否めないです。

痕跡

エリスはサンダルから外出用のダークブラウンのブーツに履き替え、第七学区へ訪れていた。エリスが家として使っているビルは、この第七学区に隣接している第十学区にある。フロントジップを開かれたパーカーのフロントポケットに、左手だけ差し込み右手は外に出したまま下におろす。これが彼女のスタイルであり癖であった。

「一応……撒いておくか」

ふう、と一息つくとエリスはボソボソと呟き始めた。祖父である美堂蛭は、ウィッチクイーンと称えられていた魔女の血を引いており、少なからずその孫のエリスも血を受け継いでいる。その蛭の育ての親でもあるマリーア・ノーチエスは、そのウィッチクイーンの弟子であり片腕の凄腕の魔女。現在百四十歳になるがまだまだ健在で、たびたびエリスや蛭に助力や助言を施している。

現在エリスが呟いているのは、マリーアから教わった魔の痕跡を察知・追尾するための魔術の一種。本来は正式に使用するには魔術用の木の実を用いるのであるが、エリスは身近に入手できる胡桃で代用していた。右手にもった胡桃を、ゴリゴリ音を立てて、粉上に粉砕しエリスが発する言葉を載せて風に舞わせる。

「さて、あとはうまく引つかかれば……」

胡桃をすべてすり潰し終えたエリスは、歩きながら周囲に目を配った。常に周囲を警戒してしまうのもエリスの癖の一つ。

ブーディスト

今ではほぼ居なくなった呪術師やウィッチクイーンに反する魔術師、まだエリスが蛭や両親と共にドイツに居た頃、彼らに襲われ戦う日々を送っていた為自然と身についてしまっていた。蛭がまだ十

代の時に呪術王を倒した為、フーディーキング呪術師達はその力を極端に弱める事になり、今では出会う方が稀な程である。呪術に対抗するための唯一の手段である呪い返しは、呪術をかけた呪術師に呪術を返し、かけた術者自身を死に至らしめる方法であり、エリスは当然ながら呪い返しを使用することはできる。これも生きる為に必要な事でありマリア直伝であった。

下準備を終えたエリスは左手をポケットから出すと、握っていた折りたたまれた携帯を開く。そこに表示された時計は、まだお昼を少し過ぎたばかり。今年十五歳であるエリスは、本当で言えば中学もしくは高校と少なからず学校に行くべき年齢である。こんな時間に街を歩いているのは、主婦や社会人か大学生かスキルアウトくらいだ。

割とリーズナブルな価格の服屋が集まった一セブンスミスト《Seventh mist》、学生達に人気で放課後や休日はお客の入りは多い。学園都市内で有名な常盤台中学等の上流の学校の生徒は、あまり見かける事はないが中には気に入って通っている生徒もいる様子である。ここセブンスミストの周りには、ファミレスなどの飲食店があり相乗効果が高く賑やかな一角。

エリスは其中でオープンテラスの有るカフェのドアを開いた。いらっしやいませ、と出迎える明るく元気な女性店員が、笑顔をエリスへ向けた。

「あら、こんにちはエリスちゃん」
「どうも」

昼間の時間に何度も通っているため、店員にも顔なじみが出来る。エリスは「いつもの」と常連ばい注文をすると、店員は手際よくレジに入力していく。レジに表示された金額を確認し、ちようどぴつたりあった小銭を店員に手渡した。

「あ、できたての新作のスコーンの味見してみて」
「ありがとう」

味見と称してなんだかんだでサービスをしてくれる女性店員、実はこの店の店長であるので誰かを気にする必要も無くサービスして。商品渡し口へ移動したエリスは、出来立てのスコーンの甘い香りを鼻先で感じながら、店長が手際よく入れるラテとスコーンの味のハーモニーを想像しただけで、お腹が鳴りそうになるのを必死でこらえた。

「はい、おまたせ」

「ん〜いい香り♪テラス空いてます？」

「ええ、一人お客さんが居るけどね。ではごゆっくり」

ラテとスコーンを載せたトレイを受け取り、少しでも上機嫌の鼻歌を歌いながらお気に入りであるオープンテラスへと向かった。心地よく少しだけ強い日差しも、絶妙な屋根のつくりで日陰になっているテラスは、行きかう人々や風を感じることができるとエリスにとって非情にお気に入りの場所になっている。

このテラスでゆったりぼーっとしながら、ラテを飲み有意義に一日を楽しむのが好きなのだが、今日はいつもと違って少しだけ居心地が悪い。理由としては先客としていた一人の大学生らしい女性。その女性の視線が自分に突き刺さっているような感覚があり、カップを口を含む時に一瞬目を配ると見事に視線がぶつかりその女性の正体が判明した。

「げ……」

「てめエ、何でここにいの？」

「あは、あははは」

鋭い視線で睨みつける女性にたいして、乾いた笑いしか出せないエリスはそそくさと立ち上がるうとすると、素早く移動してきたその女性はエリスの腕を強く掴み強引に椅子へ座らせた。

「よろず屋エリス……だつたわね」

「そうよ。それで、何か御用です？ 麦野^{むの} 沈利^{しず}さん」

自分の名前を呼ばれ、ぴくりと眉を動かした麦野はエリスの腕を掴んだ手をゆつくりと離れた。

「まさか、この間の仕事の仕返し？」

万屋であるエリスの元には時たま依頼が入ってくる。内容・難易度により報酬もピンからキリまでであるが先月行った仕事の一つが、とあるブツの行方を監視・追跡をする仕事で麦野との出会いを果たした。

麦野は学園都市の暗部に属すチームの一つであるアイテムのリーダー^{LEVEL5}であり、麦野自身は学園都市に七人しかいない超能力者。その彼女の仲間である絹旗と呼ばれる、エリスよりも幼いと思われる少女と対決し彼女に傷を負わせていた。エリスはその事を麦野へ問う。

「はん、今は仕事外！！そんな時にまで、あんたの相手なんかしたくないわ」

嫌味と皮肉全開な麦野に対し、今は安全と確認できたエリスは改めてスコーンを一口いれてラテを流しこんだ。そんなエリスを舐めるように眺めた麦野は、エリスに聞こえないように小さく息を吐いた。

「あんた何者？万屋蛇姫つてのを調べるだけで、半月かかった。ネットに有る情報なんて、都市伝説レベルでしかそれらしいのなし」
「それは禁則事項」
「ハア？」

少しだけキレかけていた麦野を宥める。

「今は仕事外！！優雅な時間を堪能しましょうよ」
「っんだよ。調子狂う……」

苦笑いを浮かべたエリスは、自身にのみわかる信号が思考に走る。
それは魔の、負の痕跡。

——当たりか、はずれか……

行きかう人々の姿を視界の左右に流しながら、辻斬りに使われているであろうブツの事を脳裏に浮かべていた。

痕跡（後書き）

とりあえず、麦野はエアギアのリカ姉にそっくりだと思う（笑）

痕跡2（前書き）

それでは3話目ですぐつぞー
♪

痕跡2

スコーンの最後の一口を放り込むと、さっぱりとしていながらも甘さが十分引き立っている味を堪能し、カップに残っていたラテをスコーンごと一気に喉に流し込んだ。トレイの上に載っている、使い捨てタイプのウェットペーパーで口の周りと手を拭く。使い終わったそれを両手で丸め込むとトレイの上に置いた。

「さてと……」

左中指でサングラスのブリッジを上押し上げたエリスは、テーブルを挟んで対面に座っている麦野へと視線を向けた。器用に携帯を操作しているその指は、ロボットの如く正確な動きでボタンを押している。見られているという視線を感じたのか、指が動きを止めると同時に麦野は視線をエリスへと向けた。

「それじゃ、あたしはこれで」

麦野は、左手でトレイを持ち上げ腰を浮かせたエリスのパーカーの裾を掴み、帰らせないという意味を態度で示す。ちよつとやそつとで離れないその手に観念し、エリスは軽いため息を吐きながら再び椅子に腰を降ろした。

「はあ……、まだなにか？」

明らかに嫌そうな表情と声色を麦野にぶつける。そんな態度に怯む事無く麦野は疑問をエリスに投げた。

「あんたさあ、ここに来た時からずっと右手はだらりとさせたままで左手しか使っていないでしょ？」

——良く見ているなあ

麦野のその指摘に感心するも口には出さず、麦野からの次の言葉を待つ。

「でもこの間は左手は常にパーカーのポケットに入れたまま、右手だけで戦っていた。ほら、今も左手はポケットの中」

無意識の事でエリスにとっては当たり前の行為だったため、それを指摘されたことに対して小さく笑い声を漏らす。それに気を悪くしたのか、少しだけ麦野の額に皺が寄った。

「だからあたしの右手が気になるって事？」

サングラスの隙間から紫電の瞳で麦野を見つめると、「そういう事」と声色を明るめて頷いた。

「ん、そうだ」

何かを思いついたようにパーカーの左ポケットから財布を取り出すと、そつと右掌に載せて中から十円玉を一枚テーブルの上に置いた。財布を再びポケットへしまうと、先ほどの十円玉を右掌に載せる。そしてゆっくりを右手を握り締めた。

「どんなに加減してもどんなに自分で抑えようとしても、こればかりはどうしようもないの」

少しだけ掌を開き小さく動かしてまた握り締める。それを何度か繰り返した後、握り締めた右手を麦野の前に突き出した。

「手、出して」

エリスに言われるがまま麦野は右手を出す。その上にエリスは自分の右手を移動させると、ゆっくりと握る手の力を緩めた。ぽとりと麦野の右掌に不恰好ではあるが、丸くなった物体が姿を見せた。表面にある模様を見るからに、それが元十円玉という事はぱっと見れば誰でも気づくであろう。

「うわ、十円をいとも簡単に……」

「あたしの右手は最低でも二百キロ以上、握力があるの」

麦野が十円玉に気を取られている隙に、素早く立ち左手でトレイを持ち上げるとサングラス越しの表情で、エリスは麦野に別れを告げ背を向けた。

麦野に制止すらさせず流れるような動きで人ごみに紛れ込んだエリスは、またいつもの様に左手をパーカーのポケットへ忍ばせる。暫くしてなんとなく後ろを確認したエリスは、麦野の姿が見えないことに安堵し軽く息を吐いた。

「ったく、ゆっくりしたかったのに」

がつくりと肩を落とし、半ば残念そうな表情で再度大きく息を吐く。少しだけ猫背な姿勢になりややうつむき加減で歩くエリスは、先ほどカフェで感じ取った信号に意識を集中させた。信号の強さからエリスの居る第七学区に近い場所に、痕跡があった事を確認する。信号に導かれるまま辿り着いた場所は、人気の高い発展した地下市街であった。ここは学園都市最小面積の第二二学区であり、第七学区の南南東に位置している。地下へと開かれた大きな口。その口にある階段を行きかう人の数は、エリスの想像以上に多いものであ

った。

「さてつと」

エリスは気を引き締めて、その階段を市街へと降りて行く。辻斬りは夜しか起きていないため、まだ明るい昼間は安心できる……とは言うものの、油断すべき相手ではないため信号を辿りつつ周囲への警戒を一段と強めた。

「!？」

最後の階段を折りきった所で、強引に背後から首元へ腕が絡められたエリスは一際目を大きく見開き体を硬直させる。しかし自分の首に絡められた腕の衣類と漂ってきた香水の香りが、先ほどカフエで絡んできた女性の物と同じ物と認識したエリスは、高まった緊張をゆっくりと解き体の力を抜いた。

「はああ」

「なんなの？　そのため息は！」

背後の人物に聞こえるように大きく吐いたため息に、少しいらだったのか絡めてきた腕を強引に離しエリスの頭上から尖った声を降らせた。その声の方へ顔だけ向けたエリスは、案の定その人物が麦野だという事を確認し肩を落とす。

「なにか？」

呆れたように垂れた目つきで麦野へ質問を投げかけた。その表情が気に入らなかつたのか、右手の人差し指をエリスの額に当ててぐりぐりと押す。

「う、うう」

「あたしがここにいないのか？ ああ？」

「いえ、そんなことはありません」

左手で麦野の手を払うと、人差し指を押し当てられていた部分を左掌でさする。起こったように尖らせた目で麦野を睨むと、してやったりと言わんばかりのにやりとした笑みを浮かべていた。口の端を上げて笑っているため、まさしく悪女という名がふさわしいとエリスは思ったが、これ以上めんどくさいのは遠慮したいエリスはその言葉を胃袋へと素早く飲み込む。

「それで、ここにはその辻斬りの手がかかりでもあるの？」

辻斬りという単語を聞き体を強張らせたエリスは、先程とは違った意味で大きく息を吐いた。

「いつから？」

エリスのその言葉は、『なぜ辻斬り事件について動いていることを知っているのか』、という意味を込めて麦野へと投げかける。

「最初から」

それに対して麦野から出た言葉は短く簡潔だった。麦野が知っている理由、それについてはエリスからの問いにあっさりと麦野は口を開く。

先月麦野と初めて会った日、麦野達アイテムのメンバーは、ある集団の暴走阻止及び彼らの所有しているブツも回収する仕事に当たっていた。エリスの戯れが終わり、集団の殲滅とそのブツが入って

いるであろうアタツシケースと黒い布に包まれた細長い物の確保に成功する。その後、別組織の殲滅の仕事を受けて現地へ向かった麦野達の前には、無残にも無数の切り傷をつけられ息絶えた死体の海。詮索する麦野が見つけたのは、以前対応したとあるブツ確保の依頼主であったという証拠。

「そして今受けている依頼は刀の所有者を殺し、刀の入手もしくは破壊」

言い終えた麦野の目から逃がさないという意味を、強く感じたエリスは観念したようにゆっくりと呼吸をし、左手を自身の額に当て首を軽く左右に振った。

「わかったわよ。目的は同じみたいだし、一緒にくればいい」

「あの日もあたしじゃなく、絹旗とのタイマン一対一を選んだから頭は切れると思ったけど……、見込み通りね」

麦野は左手を腰に当てエリスにウィンクしてみせる。

「一時協力して犯人探しね、よろしくエリス」

「はいはい。それじゃついてきてくださいな、麦野さん」

言われるまま後ろについてくる麦野を、少しだけ心強いと感じながら撒いた信号へ再び意識を集中させた。

痕跡2（後書き）

痕跡はまだまだ続きます。

複数回でひとまとまりにするやり方で、
行こうと思います。

痕跡三（前書き）

お待たせしました、痕跡の第三話目です。
ご覧くださいますか

痕跡三

負の痕跡を辿り地下市街を歩くエリスとそれに続く麦野は、人の流れに沿うように静かに歩みを進める。地下市街のメインストリートの左右に並ぶ、店のウィンドウに目もくれずエリスは信号に導かれるままゆつくりと。ただ着実にエリスにはその痕跡が近づいている事を感じていた。

「こつち」

後ろについてきているであろう麦野に、一瞥をくれると麦野は無言のままエリスの背中を追う。エリスが示したのは明るいメインストリートから横にそれた少し暗く細い道。細いといってもエリスと麦野の二人が、横に並んで歩けるくらいの幅はあるその道の所々に痕跡がある事をエリスは感じていた。

エリスは左手をポケットから出し、中指でサングラスのブリッジを少し上に押し上げたまま薄暗い道の先を見やるエリスの目には、黒い靄の様な視覚として見えている。

「おかしい……」

その言葉に、麦野は無言という形で問いかけると続けてエリスは説明するように話し始めた。

「痕跡が、この先からぱったりと消えているの」

エリスは振り返りメインストリートの方に視線を移す。この道に入ってわずか十歩ほどしか歩いていない位置で、痕跡が終わっている事の違和感にエリスは頭を捻った。

魔や負の痕跡を今まで追ってきた経験上、証拠やそれ自身に辿り

着く事はあっても何手がかりなしに消えているという事は今回が初めてのことである。

——ダミー？ いやそれにしても、はっきりと見えているのだから間違いなくこの場所に……

「痛っ」

無言で周囲を見渡しながら可能性を模索していたエリスは、その声にはつとなり顔を向ける。そこには、先程まで近くにいると思っていた麦野がエリスの位置よりさらに奥の所で立っており、自分の指を見つめながらぶつぶつと何か呟いている姿が見えた。

「どうしたの？」

「ん？ ああ何か光ってると思ってつまんだら、なんかの破片だったみたい」

近寄ってきたエリスに向けて、拾い上げた破片と自らの指を差し出す。やれやれといった表情を浮かべながら、エリスは金属片のような物見つめる。目の端には赤い液状の物がぶつくとふくらみ、重力に耐えられなくなったそれが指の腹をすべりコンクリートの道の上へと滴り落ちた。

「まったく、血が出てるじゃないですか。拾う時は気をつけな……ッ!？」

エリスの言葉を遮ったのは、麦野ではなくエリスの感覚自身。エリスが視覚する痕跡がざわつき始め、痕跡が全く無かったエリスと麦野が立っている場所に、富めどなく集まり始めエリスのその感覚を視覚を黒く染め上げる。

「これは」

エリスはぶつぶつと呟き、強制的に追跡の魔術を解除して自らの視覚を現実に戻した。麦野の右掌に置かれた破片をそつと右手でつまみ、左手に持ち出したハンカチでソレを包む。パーカーのポケットにそれを仕舞い、今度は麦野の血の出ている右手の人差し指を見つめた。

「どうしたの？」

怪訝な表情を浮かべて質問をしてきた麦野に対し、エリスは返答する事無くただひたすら見続ける。

「ちょっと！」

エリスから返事が無い事に苛立ったのか、麦野は指を見つめているエリスから強引に手を引っ込めた。

「うーん」

腕を組みながら唸り声を漏らすエリスは、眉間に皺をよせた険しい表情で地面と麦野の手を交互に眺める。

「一人で考えてないで、あたしにもわかるように説明しな」
「わかった」

麦野の口調が少し強いと感じ、そろそろ離さないとキレだしそうだと感じたエリスは、あくまで可能性として自分の意見を麦野へ話し始めた。

「多分、麦野さんが拾った破片は犯人の撒き餌だと思う」

「撒き餌？」

「そう……」

先ほど破片を包んだハンカチを広げ、それを麦野の前へと差し出す。

「あ！」

中を見た麦野は咄嗟に声を上げた。それとは対象に、動じる事無くエリスはそのハンカチの中へ視線を向けた。そこにあるはずの刃物はなく、あるのは刃物の形に黒い染み。その部分は、なんとも言えぬ臭いを仄かに感じさせる。

「変な臭い」

「これが撒き餌です。麦野さんの血を吸い次の標的になった証」

「へえ、それじゃあ次に狙われるのはあたしって事か」

不敵な笑みを浮かべた麦野に対し、エリスは無表情のまま頷いた。エリスは麦野のその表情を見てこの後の彼女の言葉を容易に予想することが出来た。

「ならば好都合ね」

「やっぱり」

麦野の予想通りの言葉に、エリスは呆れ顔で軽いため息を吐いた。

「あら、わかりやすいじゃない。あたしが狙われているならそいつを逆におびき出しブチ殺す。簡単でしょ？」

「まあ理屈はそうでしょうけど……。ま、麦野さんにわかりやすく説明します」

「説明？」

「はい。負や魔を纏うモノは、血痕の様に必ず印を残しています。印というのがあたしの言う痕跡というモノで、通常は見えません」

「あんたはなんで見えてんの？」

「それは企業秘密です」

「あつそ」

麦野が駄々をこねる子供の様な拗ねた表情を浮かべたが、エリスは気にせず説明を続けた。

「しかしその痕跡はそれに触れる人を絶え間なく誘っています。そして無意識に引き寄せられた人が、実際に被害に合った犠牲者：そして所有者でもあります」

「所有者だと？」

拗ねた表情から一変し真顔になる麦野。

「はい。恐らく犯行に使われた刀は魔剣、もしくは妖刀など同等の類の物です。伝承や噂にあるように所有者の命を喰らい、さらに切り刻んだ人間の血を吸って己を生き永らえさせています。今回の事件の被害者達の死体が二種類あった事は知っていますか？」

眉間に寄る皺が徐々に増える麦野を見ながら、エリスは回答を待つ。

「深い斬り傷が原因で即死とか」

「そうですね、一つは斬り傷のある死体。もう一つはミイラのような干からびた死体」

「干からびた？」

「辻斬り事件に報道が集中していますが、実はミイラのような死体が発見されたという事件も起きているんです。しかも同時期のこのタ
イミングで」

エリスは麦野に背を向けて、ゆっくりとメインストリートの方へと足を進めた。後を追ってくるようにブーツの底がコンクリートを蹴る音を感じ、エリスは再び口を開く。

「所有者をころころ変える理由はただ一つ。その所有者の命を、魂をすべて吸い取った為新しい器が必要なのです。その為、定期的にその痕跡に人間をひきつけている」
「なるほどね。引き寄せられた人間が辿り着く先にあるのが、標的の印である撒き餌って事か……」

麦野の言葉に満足したエリスは、メインストリートと今居るわき道の境界線の手前で立ち止まり、顔の左半面を向け、顔を微妙に動かし麦野へ合図を出した。

「そして、その撒き餌に引っかった人間を狩るのが、イキガイなのです」

そう言ったエリスがメインストリートへ一步を踏み出す。ただ当たり前その行動。麦野もエリスに続き足を踏み入れた。

「な……」

麦野が声を聞くと、エリスは目の前にいるそれに視線を合わせはずさない。

「なんなのよ、これは」

麦野が疑問を口にするのは仕方が無い。先ほどきたメインストリートと違い、今二人が立っている場所は同じでも、一面が紫色のフィルターが掛かったような空間。人の気配が無く、二人の先に対峙するモノが一つ。

「フフフフ、餌、獲物、血」

不気味な笑みを浮かべ不清潔さを感じさせるボサボサの髪、窪んだ目元にやせこけた頬。来ている服だけは綺麗で、レディーススーツを身に着けている。服装と胸元の膨らみから、このモノが女だとエリスは確信した。女は鞘に収められている日本刀の、鞘口辺りを左手で掴んだまま佇んでいた。

「これって」

「そうです。向こうからお出ますよ」

二人が身構えるより早く、刀を持つ女は右手で柄を握りしめゆつくりと鞘から抜き、その刃を二人の前に晒し出す。エリスは、その刃にうつすらと黒い靄が纏っているのを感じていた。

痕跡三（後書き）

如何でしたでしょうか。

一つの章？話？を複数に分けるやり方を、試しているので進みが遅いですが、

ご愛読いただけたら嬉しいです♪

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1811p/>

とある科学の万屋蛇姫～アスクレピオス～

2010年12月13日21時26分発行